

今こそ読む この1冊

潮木守一

名古屋大学・桜美林大学名誉教授

金子元久 著

『大学教育の再構築』

(2013年 玉川大学出版部)

実証できなかった学生の学習状況

今から30年ほど昔の話になるが、日米の共同研究に参加したことがある。その当時日本経済はすこぶる好調で、自動車のシャワーのような輸出がアメリカ産業にとって大きな脅威となっていた。その当時、繰り返し語られた台詞がある。日本経済の素晴らしさは高く評価できるが、話が高等教育となると、日本の大学はとうてい高く評価できないという話だった。こういう話を聞かされるたびに、肩身の狭い思いをしなければならなかった。ところがそのような雰囲気なのか、アメリカ人教授の一人が立ち上がって、こう弁護し始めた。「日本の大学生はカフカを読み、仲間同士で議論している。アメリカ人学生でそういう学生はいるか。アメリカの大学生の間にはこういう文化があるのか」と言うのである。日本の大学生は自分達で哲学書を読み、それを巡って学生同士で議論する文化を持っている、この事実を見逃すべきではないという指摘に、多くのアメリカ人に取り囲まれた会議だったが、思わず救われる思いがした。

こうした話が象徴するように、今から30年ほど前には、どうしても断片的な個人的な経験・印象をもとに議論するしかなかった。日本の大学生は学習時間が短いのではないかといっても、それを実証的に明らかにした調査はまだ存在しなかった。日本の大学生は自発的にカフカや哲学書を読んでいるといっても、それがどれほど一般的なのかデータは全くなかった。ましてやアメリカの大学生がどれほど教科書以外の教養書を読んでいるかという情報はなかった。こうした印象批評の段階を早く乗り越える必要があることはわかっていたが、なかなか実現できなかった。

当たり前ではなくなった自学自習

今回取り上げる金子元久教授の研究は、対象大学生



50,000人、大学教員5,000人の調査結果をもとに、日本の大学生が何をどれだけ学んでいるのか、あるいは学んでいないのか、その実態に切り込んでいる。その調査結果は既に部分的にメディアで報道され、大きな驚きを社会一般に与えた。日本では伝統的に大学生とは、他人から教えてもらうのではなく、自分の手で学ぶのが当たり前だとされていた。自学自習は大学のスローガンであり、大学生のモットーだった。ひと

ころまではそれで済んだが、次第にそれは大学の言い逃れではないかと世間は疑い始めた。世間は自学自習という口実に眠り込んでいる大学に疑惑の目を向け始めた。

今回の金子元久教授の調査は、日本の大学生の7割以上は週当たり5時間以下しか自発的な学習をしていないというショッキングな事実を明らかにした。アメリカではそのような大学生は2割弱にしかならないという事実と、いかに対照的であるかを実証的に示した。かねてから1時間の講義を受けるには、その倍の時間の予習・復習が必要とされる建前があったが、実際にはその水準の3割から6割しか学習していないという事実が明らかになった。こうした大学教育の現実暴露は大きな社会的反響を呼んだ。

学生を勉強させるシカケが必要

金子元久教授はこうした事実を明らかにしながらも、ここから「ダメ学生論」、「ナマケ学生論」に与する立場は取っていない。自学自習を唱えているだけでは学習の实质化が達成されない以上、学生を学習させる大小さまざまなシカケが必要なことを指摘している。アメリカの大学図書館が夜中の12時まで開館し、しかも多くの学生であふれている光景を目にすれば、この知的バイタリティの格差がいかなる国力差となって現れることか、脅威を感じない人はいまい。本書のメリットは大学教育のタテマエに惑わされず、その中身に肉薄した点である。